

多神多仏（「カミ」）のくに・奈良から③

—父から息子に受け継がれた奈良の文化遺伝子—

EURO-NARASIA Q vol. 15 より続き

明治21年（1888）2月、米国聖公会から「奈良」に派遣された宣教師アイザック・ドーマン（1857—1931）は、以後足かけ8年間にわたって奈良で暮らした。

アイザックは日本（人）及び奈良をこよなく愛し、とくに奈良公園周辺の景色や文物について、これほど多くの感動を呼び起こす場所は、世界のどこにもないと絶賛した。

前号では、アイザック・ドーマン（での日本に対する評価について、左記文献により奈良赴任前後の明治中期を中心とした印象・体験をトレスした。本稿では、在住した奈良についての記述を追うこととしたい。前号同様、引用部は左記2の『日本語訳書』を参考にしつつも、故あって直接1の『原著書』からの拙訳とした。また本誌の性格を考慮し、引用箇所の指示は省略した。諒とされたい。

1. Dooman, Isaac. *A MISSIONARY'S LIFE IN THE LAND OF GODS*, Boston, Richard G. Badger, 1914（以下、『原著書』）

2. アイザック・ドーマン著／恩智理訳『神國ニ於ケル一伝道師ノ生活』（2012）阿吽社（以下、『日本語訳書』）

1. 始まりの地・奈良—首都の残影—

大和（奈良）は日本最古の地域である。日本帝国の永続性はここで成立した。日本という国家の誕生地であり、日本文明の揺籃の地でもある。日本の国のあらゆるもの—歴史に根ざしたものもあれば神話に過ぎないものもある—は、この大和のどこかにの淵源を持つ。（「それゆえに」まさにこの「大和」という地名が、日本の国全体を表すようになった。この日本という非常に興味深い国の歴史において、どの創造的な考え方も、今に続く概念の全てが、この地方で発生した。宗教の分野において、神道を生み出し、仏教と儒教を育てたのは、大和である。他の地方が生み出したのは、ただその分派に過ぎない。

かつて奈良（のまち）は帝国の首都であった。古代日本文明の母でもあった。現在の皇室も奈良で形成された。この国の歴史を通して、不変かつ高貴なものは、全て奈良で生み出された。この限定的な場所、日本の文学・多様な美術・宗教制度・礼儀作法、すなわち先進的な生活に関わる全てのもが生み出されたのである。

奈良の〔社〕寺といった宗教的建造物が、人々の精神的かつ知的側

面の生活に、影響を与えている〔…〕即ち、千年もの長きにわたって衰退している中で、19世紀後半のこの時代においてなお、奈良の宗教建造物は圧倒的な壮観で我々に迫ってくる。私には、これに匹敵するものを示すことができない。彫石、彫刻、建築仏、聖職者の階層〔を示す着衣・装飾品〕、宗教儀式など荘厳な文物に囲まれ、私は敬意が混らないではいられない、畏敬の念を感じた。道路を曲がるたびに、宗教活動をさかんにやっている寺もしくは神社を目にした。まちを包む丘陵や山あいにも、僧院や尼寺は重なるように設けられ、虚飾―自分自身すら眼に視える虚飾の一つのなのだ―の向こうを観るために世間から離れた男女で満ちていた。

1000年以上も前に政府が京都に移り、奈良の進歩や繁栄は止まってしまった。いや、それどころか、今や奈良が廃墟に近くなっていることは事実である。〔しかし〕廃墟となっているにも関わらず、古代奈良の栄光や荘厳さは、私のいかなる言葉をも圧倒してしまう。〔改宗という〕最終決定に際して、彼らは自分たち古来の精神文化と西洋のそれとを比べようとする狂気にも近い欲求を持っている、私が持ち出す比較などには目もくれない。この国で最終決定を下す最大要素は、いまなお外見の立派さであり、〔そうであるかぎり、改宗をめぐる〕宗教競争は、どこから見ても―控えめに表現して―望み薄だった。

この古いまちは、ほとんど活気が見られなかった。言うべき価値のある産業はない。他の地域との通商もほとんどない。日本で―いやおそらく世界で―最も荘厳な建造物に鎮座する銅で鑄造された大

仏が、全ての生活の中心に存在しているかのように、そして大仏のある奈良は、仏教の涅槃の象徴であるかのように見えた。つまり、奈良とは、仏教の哲学によると全ての〔被〕創造物が徐々に、しかし確実に向かう永遠回帰の渦、その象徴のように思えたのだ。ここでは宇宙が本当にそのような結末を迎えるのかは論じないが、この無限のパノラマを現実の姿で体現していた奈良のイメージは、私の心に強く残り、奈良を離れて何年も経った今も消えていない。

2. 奈良の風土

《日本最古の首都》

〔…〕奈良は日本最古の首都であり、世界的に有名な日本美術を生み出した。建築の分野においても、今日にいたるまで、奈良に匹敵するところは日本にない。奈良では「威厳」と「簡素」とが―この2者の性質を兼備することは滅多にできないのだが―見事に調和している。後世の京都・東京・日光・高野山では、建築の思想において、「豪華」が「簡素」に取って代わり、極めて豪華に装飾された美術が、それ以前の原初的で素朴な簡素さを追いやってしまった。以来、過剰な余計物で真の美術を覆い隠してしまうやり方は、今も日本で進行している。したがって、日本及び日本人の精神―その内面の渴望―を想像できる限りでの最高の―現実―に表現できる至高の美しさと宗教的神聖さを併せ持った―型で実現したのは、奈良時代だけである。したがって、教養のある日本人なら誰でも「奈良」という言葉から、美術に限らずあらゆる芸術〔技芸〕分野

において、豪華と簡素の思想を想起するのである。美術品愛好家なら誰でも、ただ表面的に端折って比較しただけで、古代奈良の美術品が―その後に首都となった―京都や東京のものよりも桁違いに優れていることが分かるのである。

《奈良公園周辺の環境》

奈良及びその近辺については、これまで再三触れてきたから、この地球上の美しい場所について、本書の読者がプラトニック〔精神的〕な愛情を感じていることだろう。奈良は、何の誇張もなく、社寺のまちと言える。その数は、人間の想像範囲を超えている。数マイル四方にわたる、ほとんど全ての目立つところに、宗教的建造物が建っている。これは、住民の宗教的生活の深さを証明している。そのあらゆる地点や社寺に歴史があり、多くの伝承がある。住民は進んでその話をしてくれるだろう。これらの社寺の中で、歴史的由緒や重要性から見ても、真っ先に名の上がるのは、大刹・東大寺である。東大寺は、まち全体の上方で山のようにそびえ立ち、他の全ての建物に影を投げ掛ける。その巨大な木造建築、古い歴史を有する伝統、無数の美術品、その歴史にまつわる事実や伝説の数々、これらが相俟って、東大寺は世界レベルの驚異的となっている。約12世紀にもわたって、全ての存在における虚飾を観る大仏が鎮座している。春日大社は地理的には東大寺の近くにあるが、その建物は「半遊牧民」的かつ「半ゴシック」的である。

《東大寺と春日大社》

当時の―今もそうだが―楽しみは、毎日1〜2時間、1人で散歩す

ることだった。寺院そのものや堀の内側に所蔵された貴重な遺物を知るまで、私は美しい丘陵を散策したり、馬に乗って巡ったりした。しかし、そのうち丘陵地帯だけでなく、実際に奈良にたくさん立地する宗教施設も巡るようになった。後者によっては、私はくつろぎを感じるだけでなく、日本で最も偉大（強大）な宗教について、実際のな知識や情報も多く得ることができた。特に、非常にたくさんある古代芸術作品に関する知識・情報は、奈良以外で得ることとは不可能であった。

〔東大寺と春日大社、これら二つの宗教的な建造物は〕日本で最も素晴らしい公園の中にあり、市街地からは少し離れたところに位置している。旅行者は、数分歩くと、「神聖な魚」がいる「神聖な池」―これは日本人が食べるのは魚だけであることを象徴している―に行き着く。この池を進んだところに、先に述べた〔春日大社と奈良公園の〕正式な入り口―鳥居―がある。その「入り口」である鳥居は、日本で最も立派な「大通り」への誘導ともなっている。この通りは、半マイルあるかないかの長さだが、完全に見通しが利いているので、距離感も広さの感覚もなくなってしまう。この通りは―現世を表現する―雑踏と騒音に満ちた旅館の活気から始まり―涅槃の永遠なる静謐を象徴する―美しい春日山が終点となる。このように、この通りを通れば、仏教の形而上学の教えである、永遠の生命の思想が観取できる。旅館の騒々しい世界から出発していくと、次第にその騒々しさは遠のき、精神が穏やかに鎮まってくるまで一歩ずつ進むと、「個」の概念は広大な森の中に消失していく。この通りは非常に短い。しかし、自然と芸術とが統合する、深

遠な宗教〔仏教〕空間の中に現実的模型を作りだしているのである。

時代で言えば―おそらく―春日大社の方が、東大寺よりもずっと古い。私は、天皇がこの神社を参拝している古い絵をいくつか見たことがあるが、その絵では現在の東大寺の敷地は、鬱蒼とした森であった。春日大社には神聖な遺物や芸術品（「宝物」）が、ほとんど残されていない。神道は「華麗」という点では、仏教の対極に位置している。人間〔信仰する者〕の見地からすると、これは全く逆ではないかと思われる。仏教は本質的に禁欲的な宗教で、専ら自ら苦行に取り組むことを教える。一方、神道は神々の宗教であり、神々が果てしない列を成して出現する。仏教と神道は、その外形的な儀式や礼法を具体化するにあたって、どちらも内的な宗教上の教え〔教義〕とは真逆に変貌したのである。

考古学や建築学を学ぶものにとって、春日大社の建造物は、ギリシア的な列柱の考え方や、その他初期ドーリア式といくつか共通する特徴を持つところに、興味を惹かれるだろう。しかし、春日大社の最も魅力的な特徴は「燈籠」である。燈籠の数は1年の日数（365日）だけあり、燈籠と1日とがそれぞれ相当するとされているが、この考え方は次第に廃れてきており、今や燈籠の数は、全く考慮されなくなっている。ある特定日の夜には、全ての燈籠に火が入る。暗い森の中に見える燈籠のほの明るさは、特別な感情を呼び起こす。この燈籠を見るたび、私はいつも『千夜一夜物語』の奇妙な山の話を思い出した。その山を覆う多くの石像は、実は何らかのオカルト的魔術か催眠術によって、生きたまま石像に変えられてしまった

人間たちなのである。見る者に、多くの説明不能の感情を呼び起こす場所が、ここ以外、この地上のどこにあるだろうか。

to be continued...